

氏 名 野 元 美 佐

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第565号

学位授与の日付 平成14年3月22日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市

人類学的研究

論文審査委員	主 査 教授	吉田 憲司
	教授	藤井 龍彦
	教授	江口 一久
	教授	和崎 春日 (名古屋大学)

論文内容の要旨

本論文の目的は、アフリカ都市に暮らすひとびとが金銭（money）をいかに動かすかに着目し、その動きがいかなる意味や価値観を作り出すのかを明らかにすることである。都市生活は村落より多くの金銭を必要とし、金銭をめぐる活動は、彼らの都市経験の多くの部分を占めている。本論文でとりあげるのは、カメルーン共和国において商売に長けたエスニック・グループとして知られる「バミレケ（Bamiléké）」である。彼らはしばしば、「商人」あるいは「商売の民」と呼ばれる。本論文では、カメルーンの首都ヤウンデに暮らすバミレケ都市移住民を中心に考察した。

金銭に関する従来の人類学的研究は、金銭の取引には個人の欲求を満たすための短期サイクルと、社会秩序や道徳を再生産するための長期サイクルが一つの文化内に存在し、その社会が短期サイクルと長期サイクルを金銭のコンバージョンを通してうまく接合させていることを明らかにしてきた。しかしその静態的モデルがいかなる場合に可能となり、いかなる場合に壊れ、変化するののかについては十分に論じられていなかった。こうした問題意識にたって、本論文では、首都ヤウンデに暮らすバミレケ都市移住民の金銭をめぐる諸活動を中心に考察した。

まず、第1、第2章では、バミレケ都市居住者の背景について記述した。第1章では、バミレケの首長制社会の構成について述べ、多くの人々がなぜ故郷バミレケ・ランドを離れたのか、故郷の側から考察した。高度にヒエラルキー化したバミレケ首長制社会の構造は、若者や貴族以外の者たちに犠牲を強いてきた。ヒエラルキー下部の者達のバミレケランドから都市への「空間的移動」は、彼らに自由な商業空間を与え、農民から商人へという「社会的移動」をも生んだ。第2章では、都市の側から移住について論じた。バミレケは、ヤウンデの人口の約3割を占めると言われるが、多くのバミレケはそこでの生活を一時的な出稼ぎとは考えず、そこで自分の暮らしの基盤を立てようとする。彼らは資金を貯め、自分の家や賃貸用の家をヤウンデに建てる。彼らが不動産取得に積極的なのは、故郷バミレケ・ランドの土地が稀少であり、土地の価値を知っているからである。このようにバミレケは、流入人口の多さと経済力によりヤウンデの都市化に大きく貢献してきたと言える。その反面、彼らは政治的に力をもたず、またその経済力故に、他のエスニック・グループからは疎ましい「よそ者」としてみられがちである。しかし彼らは「よそ者」であるがゆえに、「自由に」商売ができるという側面もある。このような両義的な存在であるからこそ、都市居住者バミレケの金銭の動きには独自性があるのである。

彼らの金銭の回し方をまとめると次の三つに大別できる。

一つは、金銭の量の変化、つまり金銭を増やすことを目的とした回し方（短期サイクルでの金銭の循環）である。これは第3章で論じた、商売を通して行われる投資である。バミレケの大企業家や富豪は、貧乏な家に生まれながらも、自らの才覚で零細企業から出世したと言われる。つまり、露天商から大富豪へというステップアップは不可能ではない。バミレケはわずかな資金を元手に小規模自営業をはじめ、時間や金銭の無駄を最小限にくい止め、増やした金銭は常に次の新しい計画へと投資する。彼らは、幼少期より商売を経験することで、金銭への態度や価値観、資本主義的性向を身につけてきた。その商売と価値観は「バミレケ＝商売の民」という偏見を生みだしてきたが、バミレケ商人たちはこの

偏見を商売への高い資質と読みかえ、肯定的な自己イメージをつくる。一方、他のエスニック・グループ事業主は、バミレケのエスニックな商才を否定し、誰でも獲得できる一般的なものとして、手法や姿勢を学び取ろうとする。バミレケは他のエスニック・グループとの関わりのなかで、バミレケ・アイデンティティを再生産させている。

二つ目の金銭の回し方は、金銭の意味を変える目的で行うもので、第4章で論じるトンチン（頼母子講）を通して行われる貯蓄である。バミレケのトンチンは主に、資金蓄積という経済的側面が注目されてきたが、金銭支払いを義務づけるそのシステムが人を連帯させるという社会的側面もある。トンチンへの参加は都市のバミレケ同郷者組織において義務である。この参加の強制は、金銭を稼ぐという個人的行為を集団的行為とし、義務化、奨励することでもある。つまりトンチンは、金銭獲得をひとびとに要求し、個人が獲得した金銭を一時集団のものとする事で、「利己的」に稼いだ金銭を共有化された金銭へと変化させる。金銭獲得行為を正当化することで、トンチンは商売の場を保証するのである。

三つ目の金銭の回し方は、金銭の価値を変える目的で行うものである。第5章で論じるように、バミレケ都市居住者は死者祭宴に時間や労力、金銭を費やす。死者祭宴は死者への義務を果たすことであると同時に、自分の成功や財を顕示するための機会である。また都市居住者は故郷に家を建てるが、そこに居住する者は数少ない。経済的価値のない村の家を建てることは、都市における成功の証明と村の発展への貢献という象徴的価値をもつ。同様に、象徴的価値を持つ貴族の称号は、都市の成功者たちから望まれ、購入される。これら一連の彼らの行動は、高い社会的地位を得るための投資である。しかしこれらの投資は時として、村のヒエラルキーを混乱させ、土地問題を引き起こすなど、村の秩序を変形、破壊する方向へと作用する。バミレケ都市居住者は、都市の商売で獲得した金銭（つまり短期サイクルで得た金銭）を村の伝統維持（長期サイクル）のために回そうとする。しかしそれが、村の社会的秩序や道徳性の再生産・維持ではなく、時として破壊を導くのは、彼らの故郷が、実際の村そのものではなく、彼らが都市で作りに出した括弧付きの「故郷」だからである。つまり、彼らは確かに短期サイクルから長期サイクルへと金銭を回しているが、その長期サイクルは、村の長期サイクルとリンクしていない。そのリンク先は、「故郷」という都市の長期サイクルだったのである。

これをみれば、バミレケ都市居住者の金銭の循環は、都市における短期と長期サイクルが接合した静態的な図式を描いているようである。しかし彼らの得た短期サイクルの金銭は、いったん「実際の」村で回り、そこから都市の長期サイクル「故郷」へ戻るという手続きを踏んでいる。その迂回を省くことができないのは、都市の「故郷」が、「実際の」村への投資によってしか維持されないからである。その複雑な構造は時に暴力性を持ち、村に残るひとびとに作用し、都市の共同体を揺るがせる。その暴力性は、都市で生きること、金銭を稼ぐことの過酷さを反映している。しかし、このような都市居住者の持ち込む金銭による村の秩序・道徳性の破壊は、これまで言われてきたような貨幣経済化による伝統の破壊とは異なる。彼らは金銭を自在に操ることができるわけではないが、だからといって金銭に操られるばかりでもない。金銭を回すことには創意工夫する余地があるのである。

論文の審査結果の要旨

本論文は、カメルーン共和国において「商売の民」といわれるバミレケの都市住民に焦点をあて、その金銭をめぐる諸活動のダイナミズムを記述・分析したものである。

まず、第1章では、バミレケの人びとの故郷であるバミレケ・ランドと、そこから都市への移住の背景が考察され、第2章において、首都ヤウンデの都市化の歴史的過程と、それと並行した個人の移住の過程が記述される。続く第3章以下が、本論文の議論の中核であり、バミレケの人びとによる金銭の操作—それを著者・野元美佐は、現地でのフランス語での表現（トゥルネ：tourner）に即して金銭の「回し方」とよぶ—の諸相が記述・分析されていく。

著者は、この分析に際し、近年の金銭の取引をめぐる人類学的研究の成果、とくにジョナサン・パリーとモーリス・ブロックによる、個人的利得を目的とした短期サイクルと集団的秩序の再生産にかかわる長期サイクルとの接合の議論を援用し、金銭の「回し方」に3つのレベルを設定して、個別に考察を加えている。すなわち、1) 金銭の「量」の変化（増大）を目的とした行為：日常の商業実践における連続的な投資（短期サイクル）、2) 金銭の「意味」を変換する行為：「トンチン」とよばれる頼母子講を通じて個人が「利己的」に獲得した金銭を一時的に集団のものとすることで社会的正当性を与える行為、3) 金銭の「価値」を変える行為：死者祭宴や豪邸の建設など村への投資（長期サイクル）、である。著者は、バミレケの都市居住者は、都市での商売という短期サイクルで得た金銭を、村の伝統維持という長期サイクルへと「回そう」としていることを認めながらも、その行為がしばしば村の社会的秩序の破壊につながるの、彼らが想定している村が、現実の村ではなく、「故郷」という作られたイメージの上の村であるからだとし、本論を結んでいる。パリーとブロックによって提出された金銭的取引に関するサイクルの図式を基にしながらも、社会の動態の細部に注目することにより、静態的モデルを脱し、システムの変成や破綻のメカニズムにまで議論を深めたところに本論文の特質がある。

以上の概観からも明らかなおおり、論文の構成はきわめて論理的かつ堅固であり、論旨も明晰である。直接的な先行研究についても、簡潔ながら当を得た概括がなされ、本論文の位置づけを自ずと浮かび上がらせている。

論文そのものは、現代カメルーンの都市におけるバミレケの金銭をめぐる諸活動に焦点を当てたものであるが、その活動がうみだされた歴史的背景についても目配りがなされ、議論に厚みを与えている。また、膨大な一次資料を背景にもちながらも、事例の的確な選択とそれに基づく明解な考察のゆえに、近年のライフヒストリーを基礎とした民族誌記述にややもすればめだつ冗長な事例の羅列に終わることなく、闊達な記述を実現している。さらに、単に都市部での活動だけにとどまらず、人びとの出身村での活動を視野に入れ、都市と村のあいだをいわば往復運動をする形で議論を進めた結果、従来の都市と村、伝統と近代といった単純な2分法に陥らず、グローバル化した世界の中でのバミレケの活動を生き生きと描き出すことに成功している。本論文は、バミレケの都市住民についての出色の民族誌として評価できると同時に、その理論的枠組の堅固さと斬新さのゆえに、都市人類学一般に対しても新たな理論的貢献をなすものといえよう。

ただし、あえていうなら、本論文にはいくつかの弱点も指摘される。そのひとつは、上述の金銭を「回す」といった表現や「商売の民」といった用語に代表される、著者特有の言葉の使い方である。いずれも現地でのフランス語の表現に即したものであるが、この用語法のゆえに、バミレケ固有の文脈における議論と、より広範な金銭取引や経済行為をめぐる人類学的議論との接合に多少なりとも障害が生じたように思われる。用語の吟味は、今後に残された課題であろう。

いまひとつは、称号の獲得、死者祭宴、家屋の建設など、村における「象徴的」投資や、同郷者組織にみられる呼称・名称の体系についての記述と分析が表面的なものに留まり、十分な「象徴」分析が

なされていない点があげられる。このため、伝統的な慣習と現在の慣習のあいだの連続性と不連続性についての知見が必ずしも明確になっていないきらいがある。もとより、本論文の議論の目的が象徴分析にないことは自明であるが、バミレケ自身の言語に依拠した詳細な分析をおこなえば、議論がさらに深化したと考えられる。

ただ、これらの弱点はいずれも完成度を上げるための課題といった性格のものであり、本論文の意義を減じるものではけっしてない。とりわけ、パリーとブロックの図式を基にしつつも、社会動態に照らして、そのモデルを一步深化させた理論的貢献と、アフリカの都市をめぐる民族誌としての達成については疑う余地がない。本論文は、従来の都市人類学や経済人類学の枠を越え、生きることの意味の人類学とでもいうべき新境地を開いたものとして評価しうる内容を備えており、学位の授与に十分に値するものと認定される。